

# 三者関係と交換理論

増子 勝義

本小論では、いわゆる「社会関係」として扱えられる実体のうちで明らかに三者間の関係として扱え直せるものに注目している。

内容は、まず、三者間の関係の中には、二者間関係に還元できないものが存在することと、その根拠を示す。次に、三者間関係を三者として分析するためのモデル——トライアディックモデル——を提出し、その理論化の可能性を探る。ただし、これは完成したモデルではないので、日を置かずして修正されて行くだろう。また、以上のことは、行論を明確にするため、広い意味の「交換」<sup>1)</sup>として説明されてきた現象を材料として行われる。従って、従来の交換理論への批判をも許される範囲内で述べることになる。

## 1. いくつかのエスノグラフィーから

いわゆる「交換」現象として扱われてきた関係のうちで、明らかに三者の関係として扱えられるものがある。

例えば、一般交換。フローレス島、リオ族の婚姻もこの形式をとるといふ<sup>2)</sup>。ここでは、女性とともにいろいろなものが移動する。そのこと自体、説明を要することではないが、原地のモデルによる説明が重要である(図1-1)。

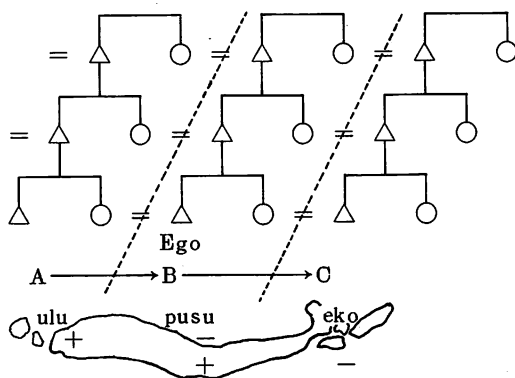


図1-1 リオ族の婚姻交換と世界認識

リオ族の人々は、ものごとの関係を考える場合、二つの極で考える。フローレス島はヘビの

形をしていると考えられ、uluとeko というのは、そのヘビの頭とシッポという意味である。人間の世界を構成しているのは、この頭とシッポの間の交流であり、交流の場が中心点となる。中心点は、プラスとマイナスを中和する点でもあり pusu (ヘソ) と呼ばれる。この場合に、Egoの集団Bに妻を与える側Aがプラス、Bから妻を受け取る側Cがマイナスとなるが、B自体はそれぞれに対してプラスでもあり、マイナスでもある。関係は三つの集団を必要とし、それら一つ一つが、与える側であると同時に受け取る側である。

モノの移動について見ると、女性の側Aから織物と米が、その反対の向きに動物あるいは家畜(水牛と豚)が移動する。

例えば、ブローカーbroker。ニューファンドランドのブローカーは、特殊な仕方でもパトロンとクライアントの間に介入し、両者を結びつける<sup>3)</sup>。第一に彼は、地方のコミュニティにおいてリーダーシップと独占的な役割を有する者である。その独占的位置とは、漁師の獲物の販売代

理店と資金源としてであり、輸出港と州都 St. Jones を結ぶ唯一のリンクを提供する者としてのものである。

ブローカーは、二つの方法で自分自身をクライアントにとって不可欠にしていく。パトロンとの関係を持つ実体的資源への接近法を提供すること、パトロンとの相互作用の意味をクライアントに解りやすいように操作することである。つまり、彼は、unknown, inaccessibleであったパトロンとの関係を、familiar と possible に翻訳したのだった。こうして一度自分をパトロンクライアント関係の中に位置付けてしまうと(図1-2)、自分は、私利、私欲を持たないのだという正当化のレトリックを使用するようになる。

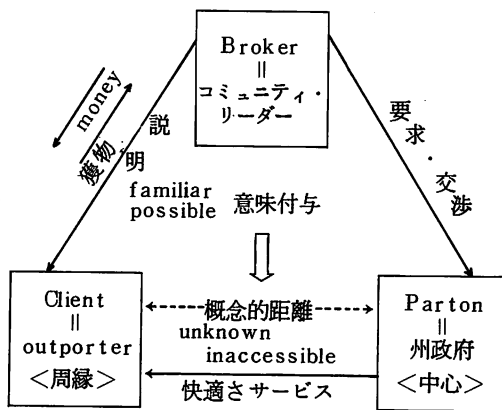


図1-2 ニューファンドランドのブローカー(筆者)

従って、ブローカーの必要とする能力は、二種類の資源に可換性を、二人の行為者に相補性を見出すことだけではなく、意味の運用・操作能力でもあるのだ。ブローカーは、なくてはならない価値のある資源の不当な分配で構造化されるような不平等関係を創り出そうとする明らかな企てによって特徴付けられる。

そして、例えばポトラッチ Potlatch。<sup>4)</sup> その多機能的性格の中で、特に注目されるのは「面目

を保つ」ポトラッチ、「競争」ポトラッチのように観衆や審判を含むものである。ふつうポトラッチを行う目的は、以下の三つのいずれかまたは重複である。

1. 時として百パーセントにも及びうる妥当な額の利子を加えて以前受け取った贈物のお返しをすること
  2. 公に親族集団や社会集団の称号や特権に対する要求権を確立すること、あるいは地位の変更を公にすること
  3. その気前の良さにおいて競争相手をしのぐこと
- である。

ポトラッチの場合も、すべてのドラマと同じように、たったひとつの原則があり、それは、観衆のためのものである。この場合、観衆は証人である。そればかりでなく、彼らは本当に審判である。最後の分析で彼らは「勝者」を選び、ひとつの主張とライバルたちの別の主張とを比較して最後の審査を行う。このことが、ポトラッチの究極目的であり、社会の他のメンバーによる事実の形式的認識がなかったら、ライバルと争うことは虚しい勝利に終るだろう。<sup>5)</sup>

以上の例は、いずれも三種類の別々の主体(個人または集団)が存在しなければ成立しない。我々は、これらの例をどのように捉え、説明していけば良いのであろうか。

## 2. 三者間関係の重要性

筆者の考えから先に言えば、前節で挙げたような三者の関係は、あくまで三者として捉えられなければならない。なぜなら、二者間関係には分解、還元できないからである。ある社会システム内の関係を分析するのに、それが  $n$  人集団であれば  $\frac{1}{2}n(n-1)$  組の関係に分解して

考えるのが、ダイアディックモデルに依拠した考え方である。従って、A、B、Cという三人集団の場合、AB、BC、CAの三組のダイアドになる。ところが、このような場合に、三者間関係においてのみ顕現する仲介の機能を見失うことになる。ジメルは、三者間の関係について以下のように書いている。<sup>6)</sup>

「各人は他の二人の間の <sup>intermediary</sup> 仲介者として作用する。そのとき各人は、仲介者として二重の機能を果たす。それは、結合する働きと分離する働きの二つである。A、B、Cの三人の要素がひとつの集団を形成する場合、たとえばAとBとの間の直接的関係に加えて、彼ら二人のCへの共通の関係から生まれる間接的關係も存在するのである (Simmel [1950]:135)。」

これを図示したのが図2-1である。

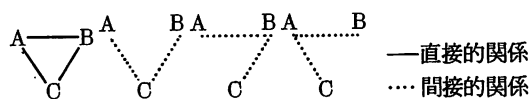


図2-1

三者間関係が二者間関係と異っている点は、この他にも三点挙げることができる。

第一に、トライアドでは、ダイアドの持つ親密性や人格性は稀薄になる。たとえば、ある男性からデートを申し込まれた女性が、もう一人の友人を伴って出かけたりののは、この効果を十分に考慮に入れてのことだろう。ある場合には、この男性にとって不幸なことに、彼が二倍のコストをかけ、二人分のサービスをしても、期待した結果が全く得られないこともある。

第二に、構造上、初めて関係を相対化し、客観化し得る主体が出現する。先のポトラッチの観衆、審判の例はまさにこのことを如実に物語っていた。ABダイアドの関係を備に観察して、批評したり、サンクショ<sup>やりとり</sup>ンを加えたりする役割を持つ者が登場するのである。いわゆる「交換」や

取引を行っているA・Bは、常に第三の存在であるCに代表される人たちの目を意識しながら贈物を決めたり、値踏みしたりすることになる。従って、Aの「気前の良さ」への補償は、Bからのお返しによってではなく、Cからの評判によって得られる場合もある。

第三に、第一、第二の点とも関連するが、社会のミクロな過程とマクロな過程との間の差異は、ダイアドとトライアドとの間の差異に原型が見られると考えられる。この差異は、各主体を超えた力によって拘束されるか否か、に注目することによって得られる。ダイアドの場合、先ず、一人がドロップアウトすれば関係は消滅するが、トライアドの場合、一方の二人の関係は存続し続ける。つまり、トライアドの場合、システムを形成する要素の一つが脱落してもシステムは存続し続けるのである。

また、トライアドでは、内部にいる主体が自己に対立するものとしての二者集団から圧力を受けることも考えられる。すなわち、二者が結託して他の一人に無理な取引を強いるような場合である。ここでは、単に互いに他者と直面し合っているだけでなく、彼らを超えた集合体とも直面することになる。

このように、「あらゆる場合に、三者の關係は、二者のそれとは完全に異なった構造を成す (Simmel [1950]:141)」から、三者間關係を、二者關係に還元したり、分解したりすることは、不可能なのである。

### 3. トライアディック・モデルの構成

数の上からは、ダイアドにたかだか一人の主体を加えたのが、実在としての三者關係である。ところが、二者の場合と、三者の場合の作用のあり方には、大きな差異があることが示された。言わば、この差異が重要なのである。この差異

こそが、三者間関係モデルの存在理由を明らかにしている。

社会関係をトライアドとして捉えることを、ダイアディック・モデルとの対比から、トライアディック・モデルと呼ぶことにする。トライアディック・モデルの構成要素は、異なる三人の主体と移転する資源であり、この資源の移転が、それぞれの行為内容を示すことになる。

このモデルは、ダイアディック・モデルとシステム・モデルを結びつける中間的モデルである。しかも、このモデルは、ダイアドにもう一人の主体が加わってトライアドを形成していく過程をも想定できる。つまり、三者間の関係が成立するための条件は、新しい加入者Cによる二者関係の認知(Cへのインプット)の段階が、彼の行為(Cからのアウトプット)の段階に先行し、その後に相互作用に移行し、関係が固定していく、といった過程にある<sup>7)</sup>。

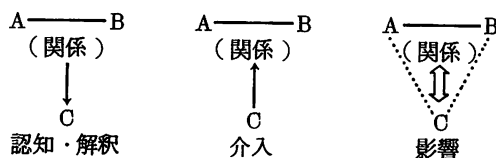


図3-1 トライアドの形成過程

この図は、ダイアドが三人以上の主体を含むより大きなシステムに発展して行くための最初のステップを示している。ここではダイアドを所与としているが、それは、ダイアドとより大きなシステムとの関係を明示するという立場からである<sup>8)</sup>。

### (1) 主体

以下では、トライアディックモデルの要素である主体について検討を加えていく。この主体のあり方がトライアドに固有のコンテクストを示すからである。コンテクストとは、広く場面、状況を含む過程の全体と考えて良い。だが、こ

こでは諸主体の中で特に決定的な重要性を持つ「第三者」に焦点をあててみたい。三者関係の特性は、この第三者が加わることによって生まれているからである。ここでの第三者は、はじめのダイアドからすれば「当事者以外の者」であるが、モデルの要素としては、「相互作用に影響を及ぼす第三人目の主体」のことである。そしてこの第三者は、我々研究者の立場から、具体的状況に合わせてその都度特定される。

第三者は、以下の変数を属性として考えると考えられる<sup>9)</sup>。

#### ・個体的変数

- i) 距離(他の二人からの)
- ii) 等質性(他の二人との)
- iii) 地位
- iv) 利害関心の大小

#### ・関係的変数

- v) 関与-不関与
- vi) 促進-抑制
- vii) 行為の積極性

これらについて説明を加える。

- i) 実在する他者としての第三者が、他の二者にどの程度近いかという状況の物理的セッティングのことである。ブローカーの場合のように、他の二者との物理的・社会的距離を微妙に調節することによって自己の利益を計る者がある。
- ii) 他の二者にとって、第三者がどの程度パーソナリティや態度の類似性を持つか。このことは移転する資源やその移転様式に大きく影響すると考えられる。一般交換における配偶者選択の基準もこのレベルに置かれる。
- iii) 関係するダイアドにおける二者の地位が等しい場合、第三者は優越者、対等者、劣等者のいずれかとして現われてくる。ダイアドに上下関係がある場合、第三者は、両者の上位者であるか、中位者であるか、下位者であるかだ。こ

れらは単純に思えるが重要である。等しい地位にある二者の優越者は、しばしば分配の中心点となる。

IV) 第三者が、自己の係わっていく相互作用に対して利害関心を強く抱いているか否か。この点は、行動の利他性や利己性に強く影響を与える。

V) 実際に相互作用に参加するか、しないか。行われている二者の相互作用に対して利害関心を強く有する者であっても、合理的判断の末、結果を予想して、交換あるいは取引状況に加わらない場合がある。その場合の彼はアウトサイダーであるが、それでもダイアドの相互作用には影響を与えることができる。

VI) 第三者の存在が結果的に相互作用を活性化するか、抑制・鎮静化するか。ポトラッチの場合は、第三者の存在が競争に油を注いでいると言える。

VII) 相互作用に対する係わり方が、積極的か、それとも消極的か。

このように第三者を位置付ける変数を考えてみると、これまで行われてきたように、第三者の概念を単にブローカーとか、ミディエーターとかいった、比較的広い概念で代表させてしまうことが不可能であるということがわかる。<sup>10)</sup>少なくとも第三者は、ダイアド間の関係を観察するか、それに対する情報を得て、その上で関係に介入してゆくものだからである。第三者が加わった後、関係がどうなっていくにしろ、何らかの影響が残ることだけは確実である。相互作用としては、三者がそれぞれ独立するか、2人が結託して2:1の形をとるか、循環形か線形の結合しかあり得ない。ダイアディック・モデルが、行為の過程において他者の存在を前提とするのであれば、トライアディック・モデルは、一つの関係の存在を前提としているということができる。

第三者に焦点を当てて三者間関係を考えることは、ここまでの議論でも暗示されたように、いくつかの利点を持っている。

第一に、相互作用に持ち込まれる新しい性質が解る。それは、二者関係とは異なる、先に挙げたような三者関係独自の性質である。

第二に、三者の関係がより具体的に見い出せることになる。つまり、バランス理論や、A-B-Xモデルのように認知面だけに焦点を当てたものではなく、機能的に一般性を持つモデルとなる。たとえば、A-B-Xモデルでは、認知的不均衡から均衡へという方向性しか見い出せない。ところが、このモデルでは、物理、社会、心理といったあらゆる面でのダイナミックな関係把握が可能となる。

第三に、三者間関係では、ジンメルが多数派への機会が生まれると言っているように、二人が結託して一人が孤立する傾向が生まれる。<sup>11)</sup>この場合の孤立者は、三者から分離した者でも、後から加わった者でもあり得る。だから、ダイアドからの作用を受けやすいし、逆に、より大きなシステムからダイアドへの抑圧・影響の中継者ともなる。この点からも、トライアドは大きなシステムあるいはネットワークの細部のモデルともなり得る筈だ、ということができる。

第四に、より一般的なレベルで、社会的存在としての主体が行為を発する場合、いきなり個体からのアウトプットとしては把えにくい。以前ある関係に意味を与え、その解釈に基づいて相互作用に加わっていくとしか考えられない。こうしてある一つの関係を所与とすると、行為者は常に可能性として我々の言う「第三者」な訳である。「何ものか」から拘束された形での行為のあり方をつかみやすいということだと思ふ。

従って、「第三者」は、外からの影響に開か

れたものとしてのトライアディック・モデルのキーとなる要素である。

## (2) 媒体＝資源

トライアディック・モデルを構成するもう一つの要素は、資源である。実際に関係を構成しているのは、各主体とその主体間の行為であるが、ここで資源とするのは、対象を広い意味の「交換」場面にしぼったからである。交換場面では、移転する資源が関係を象徴する<sup>12)</sup>。

ところで、社会学的交換理論では、「人間は、自己の利益を極大化するため、費用を伴う地位、関係、相互作用や感情の状態を避け、報酬となるような状態を求める(Nye, F.I.(1982):20)」のである。従って、ここでは、移転する資源は報酬や費用となり、そうなるためには、誰かが報酬を得ると同時に、それらの評価－比較水準が示されなければならない。

このように、交換理論自体の立場からすれば、移転する資源の分類や測定は、目玉の一つであり続けた訳だが、Homans〔1961〕、Blau〔1964〕、Foa & Foa〔1980〕らの資源論は、単に交換資源をいくつかのカテゴリーに分類したにとどまる。しかも、彼らの説明は「価値」の説明にはなっていない。資源の価値は、一回一回の状況によっても規定されることを何も説明していないからである。すなわち、交換は「行為」であり、移転する資源は「関係」を表示するという言明にとどまり、「ある資源がなぜ他の資源よりも価値があるのか」を全く説明しない。

実際、資源とは主体間をフローするものであり、同一物は、論理的には、一回の行為で一度しかフローしない。だから、「交換」は、より大きなシステムの中で初めて意味のある個別的现象であると言える。そして資源は、フローされることによって精神性が付与され、全体の

中の「モノ」として位置付けられる。記号論的に言えば、モノは他のモノとの関係の中で価値が付与される。さらには、移転する資源の価値は、コンテキスト全体の中で決定されていく。同種同型のモノでもコンテキストによって全く異なった価値を有するのである。

以上から、移転するモノは、それぞれ異なる意味を有する。モノの意味作用<sup>13)</sup>を詳しく語ることは、ここでの本旨ではないので、簡単な例によって我々の発想の一端を述べておくことにする。

Lévi-Straussによれば、女は刺激物なのであるが、移転を通して刺激物から記号への変換を行うことができる。そして、その記号の意味は先ず「エロティック」なものであり、経済的<sup>14)</sup>なものである。婚姻は、全体的給付の良い機会であるが、「女自体は、贈り物の一つ、互酬的な贈り物の形でしか中に入れることのできない贈り物のうちの最高の贈り物に他ならない(〔1949〕;邦訳151)。」そして、最終的にこの女性という贈り物の伝えるメッセージは「友好」である。

また、サピア Sapir, E.が調査したヌーツカ族のトムは、ポトラッチにおいて、毛布2000枚、ビスケット80箱、砂糖10樽を1800人に配った<sup>15)</sup>。これらのモノは、本来の意味(デノテーション)<sup>16)</sup>のレベルから言えば、生活物資あるいは日用品である。それらが、ポトラッチというコンテキストにおいては、トパーティ——「賞金」「ほうび」——となり、また、プレゼントに変換される。そして、これらのモノの最終的メッセージは、「すべての種族の酋長をわしより低い者にした」という言葉に代表されるように、主催者の「気前の良さ」を示す。

このように、「モノ」自体が多様な意味を有するが、図3-1のような意味の階統を成すも

Sa		Sé
女という最高の贈り物の移転		友好
Sa	Sé	
女の移転	婚姻	
Sa	Sé	
女	性生殖	

Sa: 意味するもの  
Sé: 意味されるもの

Sa		Sé
ポトラッチによる大量消費		主催者の気前の良さ
Sa	Sé	
それらの「モノ」を 1800人に与える	ポトラッチ	
Sa	Sé	
ビスケット 砂毛	糖布 トパーティ	

図3-1 モノの移転と意味

のと思われる。はじめに「モノ」があって、それが行為システムの中に位置付けられることによって、意味や価値を帯びてくるのである。そうして「媒体(モノ)はメッセージ」となる。

以上、トライアディック・モデルの要素となる主体と媒体を別々に検討してきた。コンテクストを構成するであろう主体の配置・連関と実際の媒体の意味の構成は、とりあえずは別々に扱った方が良いだろう。なぜならば、トライアディック・モデルでは、コンテクストを構成する主体が三者となるだけで、媒体のデノテーションはそのことだけでは変化しないからである。変化するのは、そのコノテーションだけである。

#### 4. 三者間関係の意味論へ

トライアドをダイアドに分解することはできなかったが、モデルにおいては、主体と媒体を分析上分けて考えた。トライアドの内部を説明するためである。ところが、トライアドがシステムを形成する以上、三者間の関係を全体として把握しなければならない。それにはどうしたら良いだろうか。トライアドをとりまくコンテクストと「トライアド自体の意味」との関係性を明らかにすることである。

またしても結論から先に言えば、トライアドの意味は、媒体の意味だけから演繹されるのではなく、主体を含む全体から醸し出されているものであろう。すなわち、「三者間関係」が観察者(研究者)にとって有する意味は、コンテクスト、コード、そして観察者のとるパースペクティブに影響を受ける。

パースペクティブの問題は置くとして、これまで述べてこなかったコードについて触れておく。コードとは、社会的行為に係わる規則の総体である。そして、いわゆる「交換」行為に最も係わる規則は、「互酬性の規範」であると見做されてきた。それは、「人びとは、自分を助けてくれた人びとを当然助けるべきである。また、人びとは、自分を助けてくれた人びとに損害を与えるようなことをすべきではない」(Gouldner [1960]: 170) という一般規則である。しかし、この規範からすべての交換行為群が導かれることはない。この規範は、like for like (恩には恩、恨みには恨み) ということ、しかもそのプラスの側面しか規定していないのである。エケ Ekheh, P. P. の如く、互酬性の規範そのものを三者化してみたところで、規範はせいぜい「欲しかったら、与えなさい」というにとどま<sup>17)</sup>る。または「受け取ったら、与えなさい」と命

じているにすぎない。

ただ、規範そのものの性質としては、相互作用ないし関係のあり方に係わる規範群が、二つのカテゴリーに分けられる。すなわち、対称規範<sup>18)</sup>と非対称規範である。対称規範は「交換」概念と、非対称規範は「贈与」概念と結びつく。エケの拡大規範は、まさに非対称規範を連帯論の枠組で言い換えたものである。より深い含意を探れば、彼の規範は「連帯へのメッセージを伝えなさい」というメッセージを持つ。連帯へのメッセージを伝えることのできるそれぞれの行為は、贈与でしかあり得ない。だとすると、贈与は、相手に物を与えることを目的とした行為ではないことになる。非対称規範そのものから導かれる一回性の意味を乗せた行為自体が主体にとっての目的なのである。

このように、コードすなわちここでの互酬性の規範は、相互作用のあり方の大枠を規定するだけである。従って、三者関係の全体としての把握のためには、コンテキストと関係の意味との詳細な分析が必要となる。

媒体に乗せられたメッセージは、主体間に諒解されたコンテキストに関連付けられることによって、初めて意味を持つ。だが、このことは、ダイアド、トライアドに共通の性質である。トライアドに固有の困難な点を言えば、先ず第一に、主体の数によるのだが、主体間に、コード、コンテキストが共有されにくくなる。互酬性の規範というコードだけを使ったメッセージは、ほとんどなくなり、コンテキストは交錯する。次に、各主体を送り手と受け手に分けるといった、あるいは一人の主体が同時にその両方でもあるような単純図式では、何も説明できなくなる。つまり、各主体の行為は、各媒体の、いくつかの方向性を持った移動にすぎないのだ。第三に、こうしたことから、一つの関係

システムとしてのトライアドは、多様な意味を有するようになる。

以上のように、社会関係あるいはそのダイナミックな側面としての過程を、三者として捉えようと、それは、より曖昧でつかみどころのないように思える一方、新しい局面が見えるようになる。そこで、研究者の為し得ることは、この曖昧なものを曖昧なものとしてとり込んだ意味の世界の探究ではないだろうか。

#### 注

- 1) 高木〔1982〕:132 参照。
- 2) 山口〔1982〕による。一般交換については、Lévi-Strauss〔1949〕。
- 3) Cohen & Comaroff〔1976〕。パトロンとクライアントの結びつきには、多くのタイプがある（芳賀〔1977〕）とされているため、訳語は付きずにおいた。
- 4) Potlatch とは、チヌーク語で「食物供給」「消費」の意である。より詳しくは、ヌーツカ語のパシャトルという「物を与える」という意味の単語が、チヌーク・ジャーゴンという通商言語を通して、英語に「ポトラッチ」となまって入ったものであるらしい。
- 5) Barnett, H. G.〔1938〕。
- 6) Wolff, K. H. (ed.)〔1950〕The Sociology of Georg Simmel, New York, Free Press.
- 7) ダイアドの形成過程については、富永〔1974〕を参照。
- 8) 三者を所与とすると、システム発展のダイナミクスがつかめない。「三者は二者に分解・還元できない」が、二者から三者関係が成立すると主張するのは矛盾したことはない。ダイアドがトライアドになる過程で全く新しいシステムが生まれるからである。
- 9) 作田〔1982〕は、媒介者のパラダイムとして、



主体(S)－媒介者(M)－客体(O)図式を提示しているが、筆者のものは、それとは異なる。筆者が、第三者の過程全体に対する影響を重視しているのに対し、作田のものは、SのOに対する欲求へのMの係わり方を定式化したものである。作田の言うところのMは、必ずしも実在の人物とは限らない。

- 10) 提示した第三者のモデルは、暫定的なものであり、以後さらなる精緻化を要する。ところで、ブローカーやミディエーターがいかにかに注目されているかは、Boisevain〔1960〕, Foster〔1963〕, Mayer〔1967〕, Paine〔1971, 1976〕等を参照。
- 11) Simmel, G.〔1950:137〕.
- 12) 資源は resourcesの訳語であり、これを「財」とする者も多いが、経済学でいう「財」との区別のため、そしてより包括的概念として使用するた

めに「資源」とした。

- 13) 上野〔1979〕参照。
- 14) 食料生産や技術上の専門分野における性的分業を含む。
- 15) 青木〔1979〕がこのポトラッチを紹介している。
- 16) デノテーション denotation となるものは、客観的にそのものとして概念化された記号意味部である(ギロー〔1975〕:44)。これに対し、コノテーション connotation は、記号がその形態とその機能をもつという事実によって記号に結びつけられる主観的な価値群を表現する。
- 17) Ekeh〔1974〕=邦訳 250-251。
- 18) Lebra, T.S.〔1969〕による。この二種類の規範は、それぞれ社会的行為の次の局面と関連している(下表を見よ)。

対称規範	非対称規範
<p>i) 双務的コンティンジェンシー bilateral ある仕方ではBに示されたAの行為は期待されたやり方で反応されるべきだ。 AのBに対する好意は、Bに返済の義務を課す。そして逆も成り立つ。</p>	<p>i) 片務的コミットメントまたは義務 unilateral Bの将来や過去の行為を考えないAからBに対する献身、従順、気前の良さ。</p>
<p>ii) お互いの利益のためのパートナーの相互依存 BがAの必要とする物を持っているので、AはBに対して何かを贈物として与える。 逆も成り立つ。</p>	<p>ii) 利益に対する一方的依存 AはBが彼にしてあげられることに依存するが逆は成立しない。</p>
<p>iii) 交換される諸価値の等価性 Aが与えたものは受け取った物に相当する。</p>	<p>iii) 交換される諸価値の不等価性 Aが与えるものは受け取るものより多い。</p>

## 文献

- 青井 和夫 1980 『小集団の社会学』, 東京大学出版会。
- 青木 晴夫 1979 『アメリカインディアン』, 講談社。
- Bernett, H. G. 1938 "The Nature of Potlatch", American Anthropologist, 40-3.
- Blau, P. M. 1964 Exchange and Power in Social Life, New York: Wiley.  
= 1974 間場寿一・居安正・塩原勉訳, 『交換と権力』, 新曜社。
- Blau, P. M. 1968 "Social Exchange", Sills, D. L. (ed.) International Encyclopedia of the Social Science 7: 452-458, New York:

Macmillian.

- Boulding, K. E. 1973 The Economy of Love and Fear, Belmont, Calif. Wadsworth Pub. Co. = 1975 公文俊平訳, 『愛と恐怖の経済』, 佑学社。
- Cohen, A. P. & Conaroff, J. L. 1976 "The Management of Meaning", B. Kapferer (ed.) Transaction and Meaning, 87-107, Philadelphia: Institute for the Study of Human Issues, Inc.
- Ekeh, P. P. 1974 Social Exchange Theory, London: Heinemann. = 1980 小川浩一訳, 『社会的交換理論』, 新泉社。
- Foa, E. B. & Foa, U. G. 1980 "Resource Theory: Interpersonal Behavior as Exchange", Gergen, K. J.; Greenberg, M. S.; Wills, R. H. (eds.) Social Exchange: Advances in theory and Research, 77-94. New York: Plenum Press.
- Gergen, K. J. 1969 The Psychology of Behavior Exchange Reading, Addison-Wesley. = 1977 清水徇訳, 『社会交換の心理学』, 誠信書房。
- Gouldnor, A. W. 1960 "The Norm of Reciprocity", American Sociological Review, 25-2:161-179.
- Gulliver, P. H. 1979 Disputes and Negotiations: A Crosscultural Perspective, London: Academic Press.
- 芳賀 正明 1977 「パトロン・クライアント関係の諸タイプと農民社会」, 『民族学研究』42-2:
- Homans, G. C. 1958 "Social Behavior as Exchange", American Journal of Sociology, 63-6: 597-606.
- Homans, G. C. 1974 Social Behavior: Its Elementary Forms (revised ed.), Harcourt Brace Janovich, Inc. = 1978 橋本茂訳, 『社会行動——その基本形態』, 誠信書房。
- 久慈 利武 1981 「交換理論」, 安田三郎, 他編, 『社会過程 基礎社会学 第II巻』, 東洋経済 103-131.
- Lebra, T. S. 1969 "Reciprocity and the Asymmetric Principle: An Analytical Reappraisal of Japanese Concept On", Psychologia, 12-3,4: 129-138.
- Lebra, T. S. 1972 "Reciprocity-Based Moral Sanctions and Messianic Salvation", American Anthropologist, 74: 391-407.
- Lebra, T. S. 1975 "An Alternative Approach to Reciprocity", American Anthropologist, 77-3: 550-565
- Lévi-Strauss, C. 1949 Les Structures Élémentaires de la Parenté, Paris Press Universitaires de France. = 1977 馬淵東一・田島節夫監訳, 『親族の基本構造』(上・下), 番町書房。

- Paine, R. 1976 "Two Modes of Exchange and Mediation", see Cohen & Comaroff (1976): 63-86.
- Pryor, F. L. & Graburn, N. H. H. 1980 "The Myth of Reciprocity", see Foa & Foa (1980): 215-237.
- 作田 啓一 1981 『個人主義の運命—近代小説と社会学』, 岩波書店。
- Schwimmer, E. 1979 "Reciprocity and Structures: A Semiotic Analysis of Some Orokaiva Exchange", Man, 14-2: 271-285.
- Simmel, G. 1950 The Sociology of Georg Simmel, trans. ed. and with an introduction by Kurt H. Wolff, New York: Free Press.
- 富永 健一 1974 「社会体系の行為論的基礎」, 『理論社会学 社会学講座1』, 東京大学出版会。
- 上野 千鶴子 1979 「財のセミオロジ」, 『現代社会学』6-1:159-190。

(ますこ かつよし)